10.3 学生への情報小冊子

学生への情報小冊子「学生の皆さんへ」を10,000部作成し，年2回学生員及び各支部へ配布した．

11. 検討部会に関する事項

11.1 企画室での検討状況について

企画室において，①学会から社会への提言WG，②中・長期ビジョン検討WG，③選奨に関する検討WG，④事務局のプロフェッショナル化検討WG，⑤学会英文名称検討WGを発足させ，学会のグローバル化，運営方針（本部・ソサイエティ・支部の関係），選奨の推薦の公募化・選定方法，社会貢献等について検討し，理事会に提言した．

11.2 学会提言について

学会から社会への提言として，21世紀IT社会の健全な発展に向けて，①健全な情報環境の構築のための総合的な危機管理の充実，②健全な地球環境の構築のための環境調和型IT社会の実現，③ITと社会システムの節度ある融合，の3点を中心にまとめた提言を「内閣府 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部」に対して行い（平成13年1月29日，本会・情報処理学会・電気学会），同時に翌30日には記者発表も実施した．

また，この提言を受けて理工学系と人文科学・社会科学系の「交流と共創の場」として公開シンポジウムの開催を計画した（5月9日，経団連会館）．

11.3 技術者認定制度について

「JABEE対応委員会：秋山稔委員長」において，JABEE（日本技術者教育認定機構）及び関連学会と連携を取りながらプログラム並びにカリキュラムの具現化，マニュアルの整備，審査員の養成（JABEE審査員養成研修会に参加），米国ABETの審査状況の調査（Univ. of Texas-Arlingtonの審査にオブザーバ参加），試行審査の実施（仙台電波工業高等専門学校，新潟大学の2校で実施），試行審査を終えての状況報告シンポジウム（13年3月総合大会特別企画）の開催等を行った．

11.4 ソサイエティの自立について

ソサイエティ独立採算化検討WGにおいて，ソサイエティ事業の収支分析（特に論文誌，技術研究報告），その分析結果により，仕組みが実体に合わなくなってきた論文比率奨励金に代る調整金の導入，内部留保を有効活用したソサイエティ活性化基金の設立，本部とソサイエティとの役割分担の整理，本部とソサイエティとの会費分担率の検討を行った．

13年度は，12年度の収支決算を基にシミュレーションを行い，問題点の洗い出しをする．

11.5 学会の電子化について

12年7月から和文論文誌（英文は11年8月から）をインターネット上に無料公開した．今後も引続き，課金等について検討していく．

13年3月の総合大会からWebによる講演申込み登録を開始した．今後は電子投稿へ向けて検討する．

LANの再構築及びマシン室を設置し，環境等の整備（マシンセキュリティ関係，空調管理，電源容量不足，等）を行った．

ホームページの充実・刷新をし，会員のメールアドレス転送サービスにウイルスチェック機能を追加した．

12. データベースに関する事項

国立情報学研究所及び科学技術振興事業団(JST)に対して，学会発表論文のデータベース作成に協力し，次のとおり実施した．

（1） 国立情報学研究所　総合大会発表論文3,185件の抄訳のデータを提供した．

（2） JST　総合大会発表論文3,101件のデータベース化情報を提供した．

13. 会員に関する事項

13.1 名誉員の推薦

内田 禎二（東海大）
後藤 尚久（拓殖大）
宮津 純一郎（NTT）
安田 靖彦（早大）
米山 務（東北工大）

を定款第7条イ項により名誉員に推薦した．

13.2 会員の現況

会員増強委員会では，魅力ある会員制度，良好な会員サービス，積極的PRを通して会員を増強するという目的のもとに，（1）海外会員制度，（2）フェロー制度，（3）小冊子等による学会活動のPR，（4）コンビニエンスストアでの会費振込，等を検討し実行した．

（1） 会員数は次のとおりである．

会員種別	名誉員	正員	学生員	准員	特殊員	維持員	合計
平成11年度末会員数(A)	72	33,354	3,961	5	446	328	38,166
平成12年度末会員数(B)	72	32,617	4,062	48	443	320	37,562
差(B－A)	0	－737	101	43	－3	－8	－604

（注） 名誉員の，猪瀬 博先生は12年10月11日に，クロード・シャノン先生は13年2月24日に，高原 靖先生は13年3月19日に逝去された．

（2） 各支部における会員数は次のとおりである（平成12年度末）．

支部／会員種別	名誉員	正員	学生員	准員	特殊員	維持員	合計	前年度差
北海道	1	564	194	0	6	5	770	－22
東北	7	1,044	194	0	14	7	1,266	2
東京	54	21,034	1,576	5	267	221	23,157	－1,012
信越	0	547	164	0	16	8	735	－41
東海	0	1,918	376	0	35	21	2,350	－14
北陸	0	475	141	0	8	2	626	3
関西	6	4,206	630	0	54	39	4,935	－6
中国	0	837	281	0	11	5	1,134	－5
四国	1	404	154	0	9	3	571	－14
九州	0	1,207	267	0	20	9	1,503	－10
海外在住	3	303	16	0	3	0	325	325
Overseas	0	78	69	43	0	0	190	190
合計	72	32,617	4,062	48	443	320	37,562	－604

Ⅱ. ソサイエティ事業

ソサイエティ制開始6年目にあたる平成12年度は，各ソサイエティにおいても特色のある企画等を実施し，研究調査活動も順調に推移した．また，各ソサイエティの連携を図るためにソサイエティ連絡会を4回開催した．

◎ 基礎・境界ソサイエティ

基礎・境界ソサイエティでは，ソサイエティ大会の活性化や電子化による会員サービスの充実を図るとともに，研究専門委員会の研究活動の促進や各種学術研究集会の支援を行うなど，順調に運営・活動を行った．

主な事業内容を以下に紹介する．

（1） ソサイエティ大会の改革に取り組み，招待講演の充実等の施策を行った．この結果，講演件数が前年比1.5倍となるなど，大会の活性化が図られた．なお，発表内容の英文誌特集号化や独自の賞の新設について，引続き検討中である．

（2） 電子広報活動を活発化するため，ソサイエティ規程を変更して「電子広報担当幹事」のポストを新設し，ソサイエティホームページの管理・運営体制の強化と，和文及び英文ホームページの充実による会員への広報活動の推進を図った．

（3） ソサイエティ大会にてフェローの称号が贈呈された35名の方々による新フェロー記念講演会を企画し，現在関連する専門委員会のお世話のもとに順次開催している．また，来年度のフェロー候補者として19名の方々を推薦することとし，現在手続きを進めている．

（4） ソサイエティ活性化基金による事業として，ソサイエティ大会での英語セッションの創設や時宜をとらえた特別企画の実施，魅力ある講演者による出前講演会の開催，英文論文誌の無料配布などの学生会員や海外会員の増加・優遇策，及び過去の論文のCD-ROM化など，様々な施策が実施に向けて検討されている．

（5） 新たな表彰規程を定め，国際会議の企画・運営などソサイエティ活動へ貢献のあった方へ感謝状を贈ることとした．

（6） このほか，各種の学術研究集会や国際会議などの共催・協賛など活発な事業を行った．

◎ 通信ソサイエティ

本年度はソサイエティ内に仙石副会長を主査とするAdhoc会議を設けて，通信ソサイエティの今後のあり方について検討を行った．検討結果を受けて，今年度下記のような施策が実行された．

（1） インターネット技術に関する英文論文誌特集号を企画した．1回だけの特集ではなく，定期刊行化する方向で検討している．

（2） インターネットアーキテクチャ研究専門委員会を設立し，来年度から活動することになった．

（3） 2000年11月開催のGLOBECOM 2000でIEEEと共同のブースを設け，新規入会者74名（従来海外会員数比48％増）を獲得した．

（4） 現在発行しているソサイエティニューズレターの内容を充実させ，ソサイエティマガジンとして機関誌化することに関して，フィジビリティスタディを開始することになった．

このほか，従来から進めている施策として，下記のような活動を行った．

（5） シスターソサイエティ関係を結んでいる電子情報通信学会通信ソサイエティ，IEEE ComSoc，韓国通信学会の会長・理事などが一堂に会するSister Societies Summitを開催し，Dual Membership協定に調印した．

（6） ソサイエティ大会において，英語セッションを設けた．

（7） ソサイエティ大会期間中にソサイエティ総会を開催し，ソサイエティ活動功労感謝状の贈呈式，フェロー授与式，特別講演を行った．

（8） 英文論文誌2001年1月採録分から，採録決定後の最終原稿をカメラレディで提出した場合に掲載別刷代を無料化する試行を行っている．

◎ エレクトロニクスソサイエティ

エレクトロニクスソサイエティではエレクトロニクス賞，サマーミーティングなどの伝統を引き継ぐとともに，会員増強，会計費用構造の分析・改善を進めて，魅力あるオープンなソサイエティを目指す．平成12年度の主な活動は以下のとおりである．

（1） 論文誌に関しては，和文論文誌C-Ⅰ，C-Ⅱを平成12年1月号から合併した．新しい和文論文誌Cへの投稿はC-Ⅰ，C-Ⅱのときの投稿数を合計した水準で推移している．9月に開催したソサイエティ大会では，プレナリーセッションにて第1回のフェロー贈呈式，及びSiエレクトロニクス分野（前島英雄／東工大），化合物半導体及び光エレクトロニクス分野（荒川泰彦／東大），エレクトロニクス一般分野伊藤康之，ほか／三菱電機，ほか）のエレクトロニクス賞の授賞式，記念講演を行った．

なお，第1回のフェロー推薦に関してはソサイエティにて候補者を広く推薦し，結果として24名の方がフェロー称号を授与されることとなった．

（2） 研究専門委員会に関しては，第二種時限研究専門委員会（集積光デバイス技術（12.6～14.5），超高速光エレクトロニクス（12.10～14.9），量子情報技術（12.11～14.11））が発足・再発足している．またサマーミーティングは今年で4回目を数え，昨年7月7日（金）に機械振興会館で合計8研究専門委員会の合同で盛況に開催された．

（3） ソサイエティの国際化を推進するための一貫として，平成11年度より国際活動支援補助金をスタートして，国際会議開催などの活動に対してソサイエティとして支援したが，平成12年度も引続き実施し，定着に向かっている．

（4） ソサイエティ運営関係では，ソサイエティ独立採算化WG発足に伴い，ソサイエティとしての独立した収支という観点からの議論が盛んにされるようになった．このことは，各々の事業の経済性及び会員への利便性を考える契機になっている．